

研究課題：高齢者の介護予防のための口腔機能評価および管理からなる包括的システムの
長期効果の検証とフレイルへの対応に関する研究

研究者名：藤本篤士¹⁾，武井典子²⁾，竹中彰治³⁾，福島正義³⁾，高田康二²⁾

所 属：¹⁾札幌西円山病院歯科診療部，²⁾公財)ライオン歯科衛生研究所，³⁾新潟大学

1. 目的

- 1) フレイル・プレフレイルに対する歯科保健の視点に立った評価法および対処法を検討し、その有効性を検証するために、診断法が確立されているサルコペニアの診断を行い、サルコペニアやオーラルサルコペニアからフレイル・プレフレイルの評価法や対処法を検討する。
- 2) フレイル，プレフレイル，サルコペニアと口腔のサルコペニア（オーラルサルコペニア）の関連について検討することにより、歯科保健の視点から評価法や対処法を検討する。

2. 方法

札幌市の某ケアハウス入所者入居者全 100 名のうち、希望する 30 名（男性 4 人，女性 26 人，平均年齢 87.2±4.8 歳），健常群として外来患者 35 名（男性 11 人，女性 24 人，平均年齢 31.6±10.2 歳）の調査を行った。調査項目は口腔項目として舌圧，舌の厚み，オーラルディアドコキネシス，RSST，全身項目として握力，下腿周囲長，4m 歩行速度，栄養項目として NMA-SF，BMI，問診などである。

3. 結果と考察

サルコペニアとフレイル・プレフレイルとの関連性およびオーラルサルコペニアとの関連についても検討を行った結果、下記の評価法や対処法が歯科保健の視点から貢献できる可能性が示唆された。

- 1) プレフレイル，フレイルに関わらず，サルコペニアであれば何らかの口腔の異常値が認められる傾向にあるため，口腔筋力，口腔機能，口腔筋量への積極的な介入が必要である。
- 2) サルコペニアで口腔の異常値を示すものは 85%と高値であるため，治療を含めた口腔に対する介入が必要である。
- 3) サルコペニアと判定されないが，フレイル・プレフレイルの口腔筋力，口腔筋量に異常値を示した者はそれぞれ 25%，50%であったことから，今回の調査からも歯科保健の介入の必要性が示唆された。また，臨床的には自覚しにくい口腔筋力，口腔筋量の異常を放置することにより，口腔機能の異常に至りサルコペニア，オーラルサルコペニアへと進行していくのではないかと考えられた。このことから，サルコペニアと判定されていない高齢者にも予防的な歯科保健の視点からの介入として，筋力と筋量の評価が重要であり，本研究で試みたような臨床的に簡便な筋肉量の測定法の有効ではないかと考えられた。今後人数を増やし，その有効性について検討する予定である。
- 4) 今まで 2 年間にわたり，フレイル・プレフレイルの状態の入所者が多数入所するケアハウスにおいて，評価法が確立されているサルコペニア・オーラルサルコペニアと比較検討しながら，歯科保健の視点からの評価法や対処法を検討してきた。今後，調査を継続する一方で，付属する病院の中においてフレイル・プレフレイルに対して多職種と連携した介入を行っても改善できない患者に関する調査を行う中でさらに歯科保健の役割を検討していく予定である。